

「宿業者は本能」

曾我量深と教如上人」

太田 浩史

(一)

はい、よろしくお願いします。曾我量深と教如上人って繋がるのかという話がありますが、ちよつと無茶振りに繋げてみようということがあります。

まずですね、初めに今回被災した能登の方を調べてみますと、あそこは蓮如上人も教如上人も行つたことのない土地なのに、実は物凄い蓮如上人と教如上人に対する信仰のあついているところでございます。なんでそうだったかと言いますと、実は一向一揆で教如上人の応援をした人たちが非常に迫害を受けまして、能登に逃れるしかなかったということがあるんです。ですから、能登というところは真宗大谷派の門徒が圧倒的に多いですね。能登の人口の七割くらいは大谷派だと。それくらいですから私らにとつては非常に、先ほど藤原先生がおっしゃったけれども、実は能登はある意味で、本願寺の一つの模範

的なご門徒衆がおられる所であつて、やはり妙好人とかそういう人たちが今でもおられる、たくさん出ておられる、そういう土地だということです。

そんなことから、私も隣の県ですし（太田師は富山県）、何とか（地震被災地の支援を）したいというのがあつたんですが、なかなか道路事情が悪くてですね、向こうに入り込もうにも入り込めなかったということがあります。宿泊する場所もないですし、ふらつと入り込むだけになったら、それこそ何もできない状態で、逆に（被災者の為の）弁当もらつて食べて帰つてきたということになりかねない。そういう中で、私の知り合いに茨城県の梁河さんという正藏寺というお寺の住職がおられて、この人はラーメンを作るのが得意でして、東日本大震災の時からキッチンカーを買つてですね、そしてそれでラーメンを作つて東北の被災地を応援していたんですが、そのキッチンカーが今回も大活躍しました。『ボランティアネット通信』というのを配りましたが、その一番最後の方に六月四日に珠洲市に行つてラーメンを提供したという記事があります。私はここに一緒に行つただけなんですけども、仮設住宅がありまして、その前の広場みたいな所にキッチンカーをとめて、そして色々な支援物資と一緒にラーメンを出した。たちまち百五十人ぐらいの列ができました、本当にあそこは大変な状況だなということを感じたわけですが、まだ準備も何も出来ていないのに、もう二時間ぐらい前から百五十人の方が列を作っているの、これはやっぱり少しでも早くラーメ

ンをお出しせにやいかんということになりますね。そういうことで皆で分担作業で、スープを作る人、これは梁河住職が作る、それから麵を茹でる人、茹でた麵に丼を差し出す人、さらにはメンマ入れる人、シナチク入れる人、チャーシュー入れる人、ネギ入れる人と分担でやるんです。私が一番大事なところ、最後アンカーですね。海苔をトランプみたいにくうやって添えてこれで出来上がりです。それは早いですよ、もう二十食、三十食、あつという間に出来ますから。やはり皆で共同してやりますとですね、まあ不思議なことになた海苔を差し入れただけですけれども、それでも何かやつぱり仲間意識が出来まして、行つてよかつたなと思いました。それで、富山教区の方のお坊さんらもこれなら出来るということで、その後、彼らは輪島に行ったんです。『ボランテニアネット通信』にも、輪島の朝市の跡でどうかこうとか書いてありますね。実はこの後、輪島でキッチンカーが壊れてしまったんですよ。もはや修理不能ということになって、さあ困つたなと。でもまあ、復興が少しずつ始まっています、何とか皆さんこれからは元気になるだろうなと思っていました。それが、また水害がありまして。この水害が本当に皆さんの声を聞きますと、もう地震よりずっと酷い状況で、私どもがラーメンを出していた仮設住宅も泥の海に埋まっちゃって、あそこは抽選でなかなか入れなかったところで、皆入れたことを喜んでおられたんですが、それがまた今は避難所に逆戻りしております。もう完全に一から出直し。あるいはマイナスからの出直しであります

から、やつぱり心が折れますね。そういう状況なもので、なんとか一日も早くキッチンカーを、ということで、クラウドファンディングをやっています。聞いたら今二七〇〜二八〇万円は集まったそうですが、キッチンカーが五〇〇万円しますの、何とかもううちよつと、一日でも早くというようなことがございまして、皆様に急遽こんなもの（クラウドファンディングのチラシ）をお配りしているところでございます。また少し考えてあげていただきたいと思います。

（二）

さて、先程、藤原先生の非常に明快で壮大な、これは仏教史観と言つてもいいですね、それが語られてまして、私の手間がだいぶ省けております。これ共同作業でありますね。それで少し、先程の藤原さんのお話を補足するようなことから入りたいと思うんですが、この真宗の法名ですね、私どもは釋何々という法名を使っております。これを「相伝」のほうから見るとどういう解釈になるかと言いますと、『稟承餘艸』という書物がございまして、これはだいたい儀式論なんですが、「稟承」って何じやつていうようなことを思われる方もおられると思いますんで、存覚さんの「嘆徳文」を一応見ておきたいと思えます。

幸いに黒谷聖人（法然）吉水の禪室に臻りて、始めて弥陀覚王浄土の秘局に入りたまひしより爾降、三経の冲微、五祖の奥さく、一流の宗旨相伝誤つこと無く、二門の教相稟承、由有り

（『真宗聖典』第二版901頁）

と、この「稟承」です。つまり教相というものを受け継ぐことが「稟承」。そういうことで、この『稟承餘艸』というのは「こぼれ話」というんですね。このこぼれ話において儀式論が語られておりまして、その中に、法名とは何かということ、法名について書いてあるんですね。この法名というものはどこから来るかという話ですね。『大経』の、これは皆さんよく、存知の部分ですが、

時に国王有しき。仏の説法を聞きて心に悦予を懷き、尋ち無上正真道の意を發しき。国を棄て、王を捐てて、行じて沙門と作り、号して法蔵と曰いき。

（『真宗聖典』第二版11頁）

『稟承餘艸』では、この沙門法蔵というのが真宗における最初の法名であると書いてある。私らは愚禿釋親鸞とか、あるいは法然上人から頂いた釋綽空とか、この辺に淵源を見ようとするんですが、沙門と釋は同じ内容だということですね。だからここに仏の説法を聞いて心に悦びを抱いて無上正真道のところを發したと。つまり、無上の道を無限に聞いていくという、そういうところを發した、これがそもそも法名を頂くということ、言ってみれば、先ほど帰敬式の話にありましたが、帰敬ということですね。こういうことがですね、法名の意味としてありますよ、というようなことを『稟承餘艸』が書いています。これはやっぱり一つの参考になることではないかと思うんですね。法蔵の道を受け継ぐ、法蔵魂を受け継ぐ、これが法名を頂くということなんです。先程、そういうことを藤原

さんの話を聞いて、おつ、と思いました。

それからですね、能登といったところを起点として、やはり真宗復興の運動を起さないといかんのだという話だと思っんですが、これは真宗復興運動だと。私たちは被災地の復興と言いますと、常に物を持って行ったり何か手伝いに行くというような、言ってみれば、物質的な話になりますけれども、真宗復興運動をするんだと。これは、例えば、明治の初め、西南戦争の時に熊本の本町が全て丸焼けになりました。熊本城を巡る戦い、田原坂の戦いから、熊本城の城兵たちが町を焼いたんですね、西郷軍に利用されなかったために。だからもう一面、みんな路上生活になるわけです、熊本の本町が。そこへ、まだ煙がくすぶつてくるくらいの時に、嚴如上人が乗り込んで、そして延寿寺というお寺の焼け跡で何をやったかと言ったら、帰敬式です。や。なんでも四万人ぐらいに帰敬式をやった。もちろん義捐金も持って行くんですよ。でも義捐金を持って行くだけではなくて、ご門首（当時は「法主」）自ら、まだ戦災の跡も生々しい、どう言いますかね、戦いの跡があつてまだ血糊みたいなものが残っていたというのですが、そういう所へいきなり飛び込んで、焼け跡で帰敬式を行う。ご門首の姿というのは、これはやっぱり大谷派の一つの近代を象徴する出来事だったろうと思います。それから明治二十四（一八九一）年、濃尾震災がありましたね。あの時も東海地方は、特に岐阜、それから名古屋のほうは大変な被害を受けたわけですが、その時に宗門は小さな声明本をたくさん作って、それをもう大量に送り込ん

で、地元の僧侶なんかを通してながらそれを配って歩いたとい
います。私も東日本大震災の時に、会津若松に避難しておられ
る双葉町、大熊町の人たちを慰問したことがあるんですが、避
難所で「私らは大谷派として来ておりますが、何かしてほしい
ことはありますか、ご希望はありますか」と言ったら、「勤行
がしたい」と言うんですよ。「仏壇もないし声明本もないし、
だから勤行が出来なくて非常に困っております」ということ
だったんです。それで、会津若松の役場に話を持っていったん
だけど、「絶対いけません」と、「特定の宗教は絶対いけません
」と言うんです。「何ですか」と言ったら、もうすでに別の
の宗教が入り込んで、いわゆる靈感商法をやったんですよ。そ
の結果、もう宗教は全て駄目と、こういう話になりました。し
かし、本当にそういう、世俗諦と勝義諦ということがありまし
た。そういう勝義諦における支援ということを、私らは真剣に
考えないかん時期になっていると思います。

それからですね、真宗復興という言葉が藤原さんから出ま
したが、これを教如上人はどう言うかと言いますと、仏法再興
です。よく大坂抱様というように、教如上人は戦鬨的な
人で、好戦的な人というようにないわれれます。顕如上人
が石山退場して雑賀の鷺森という所に下がられたけれども、
教如上人は徹底抗戦を叫んで石山本願寺に籠城を続けた、だ
から戦争好きだというものを調べてみますと、天正八年、一五八
〇年の三月七日が確認できる中では一番古いご消息でありま

す。このご消息は、顕如さんが出しておられたものとあんまり
内容の変わらないご消息でございます。この上人の代々の御
座所を、つまり御真影がある場所を法敵の蹄にかけることは
口惜しいと。法敵とは信長のことでありまして、むぎむぎこん
な聖地をですね、信長ごときに手渡すのは悔しい、非常に口惜
しいから戦うんだと。だから仏法の為に皆、身を捨ててくれと
いうような内容なんですよ。ところがこの大坂抱様の御消息
というものは、三月七日のご消息の後、閏三月二十七日になり
ますと、これは仏法再興のために私は立ち上がったと、初めて
その言葉が出るんですね。二十一歳の時だったかな。悔しいか
ら、もう敵に渡すのは悔しいからという話ではなくて、仏法再
興の運動を起こすから、皆、心を一つにしてほしい、自分につ
いてきてほしいという、こういう内容です。なんで仏法再興な
のか。この「仏法」は間違いない真宗のことです。なぜ再興な
のか。おそらく今日の話で言えば、もう当時の本願寺は顕如上
人の力もなくてですね、三人の家老、下間頼賢、下間頼廉、下
間仲之という三人の家老が牛耳っていました、彼らはもうは
つきり言って利権なんですよ。だから利権のために戦ってい
る。言ってみれば、完全に世俗諦になっているわけですね。そ
こで教如上人は、もうこんな本願寺は終わったと、だから再興
するんだという意識があるんですね。

〈三〉

それで、この再興について、これまで一体どういう理念があ

るのかということ、大桑斉先生などが随分いろいろと苦心して本を書いておられますが、たまたままだ見えてこないものがあつた。それがですね、今回少し見えてきたというところで、それも曾我量深さんと無縁ではないというところをお話したいと思います。

前回のここでお話（二〇三年「京都欲聞会」の記録『もえあがれ法蔵魂2』所収「曾我量深と相伝」）で曾我先生と「相伝」の関係みたいなものを少しお話ししたかと思ひます。そして「相伝」と法蔵菩薩論、これが実は深い繋がりがある。そのことについては、「相伝」というものを初めて世に出した堺・真宗寺の足利演正先生がこういうことを息子さんに語っている。これは「相伝義書」の中の折紙みたいの（月報）が入ってますね、あの中にそういう記述があるんですね。息子さんは「養子さんですから、お義父さんに聞いたんです。「要するに一言で言う」と相伝って何ですか」と聞いたら、足利先生は言下に「それは曾我教学の元となつたものです」とはつきり答えている。それが、一体どの辺でどう元になっているのかということが非常に気にかかるところではあります。先日、柴田秀昭先生、これも今ずっと相伝の研究を、ほとんどライフワークとしておられる、「相伝義書」の編纂をやつた人です。柴田先生ともそういう話しておるんですが、やはり曾我先生が「相伝」の、膨大なものを読まれたということは考えにくい。そこはやはり足利演正先生がロサンゼルスで曾我先生にお見せした『三識之事』ではないかと。これは足利先生も自らそれを言っ

ておられるんで、おそらく昭和二十六（一九五二）年か二十七年か、その辺です。まだアメリカに日本人が渡航できるようになつて最初か、その次の年ぐらいに曾我先生はロサンゼルス別院に行つておられるんですね。その頃のロサンゼルスは、例えば日系アメリカ兵の四四二部隊というのがあつて、その人たちが大変な激戦をヨーロッパでやつてトラウマを抱えて別院に来ておられたり、あるいはほんのこの間まで日系人はこの収容所に入れられていた。足利先生もそうですね。足利先生は南カリフォルニア大学というところで教鞭をとつておられましたから、収容所に入れられたんですよ。そういう経験をした人たちが集まる場所はロサンゼルス別院で、曾我先生はそこへ行かれて、当然通訳だとか色んな世話足利先生が見ておられたと思うんです。その間にホテルで曾我先生に『三識之事』というものをお見せしたら、しばらく借りたいということで、ホテルですつと読んでおられたということを私は聞かされております。

さて、それでは『三識之事』とは一体どういうものかというところ、そんなに長いものではなくて『相伝義書』の中の「短文集」というのがあるんですが、その中に収録されているもので、ごく短いものですが、それをちよつと要約してきました（資料の掲載省略）。三識というのは何かと言いますと、業識、転識、現識といつて、いわゆる唯識学で、第六識、第七識、第八識に相当します。これの解釈が実は二種類あるんだと。一つは流転門、もう一つは還滅門であると。先程、それを世俗諦と勝義諦

という言い方で、藤原さんは、これは長尾雅人さんもそういう考え方なのかな、言われましたが、この『三識之事』ではですね、世俗諦というものを自力とおさえる。勝義諦は他方としておさえている。自力流転門、他力還滅門というんだと。この還滅門とは何なんだということですね。滅度。還滅度の相というのは還相だと思えますね。だから還滅というのは悟りに趣かしめるという、要は、平たい言い方をすれば、救済です。これは還滅門。流転門というのは文字通り出口のない悩みですね。こういうふうに、唯識というものは両方を見るものなんだという捉え方を、まずします。

そして、まず流転門については簡単に解釈してあります。『三識之事』では『唯識論』と書いていますが『成唯識論』の解釈で、五感とそれから第六識というものの、この意識というものが末那識のはたらきで色んなものを分別する。百八つの煩惱が出てくるというのもそこなんです。そういう私たちの迷いというものが、この意識というものから作用しているんだと。その中で現識というのがまずあって、これが第六識なんだと。これはもう皆さん、仏教学の常識みたいにしてやっておられると思います。それから第七転識。転識というのは第七識で、この第七識は我ですね、これは我がもの意識する、そういう不思議なはたらきなんです。一体いつからそんなことが始まったのかというと「無始爾来」。しかも、私たちの意識でコントロールできない世界、言ってみれば無意識の世界ですね。そこで忽然として念を起して何かにとらわれるわ

けだから、自分の力ではどうにもこれはコントロールできない。そういうことで私たちは苦しむわけです。業識、これが阿頼耶識だと、こういうふうに書いてあります。阿頼耶識というのはもうそれらを全部収めてですね。今日の、例えばDNAとというのは、それこそ生命の誕生以来の情報を皆持っているんだと、こう言われますね。それだけでも大したことなんです、それどころでなく、もう一切衆生全ての万有のもの、心羅万象全ての情報をこの八識、阿頼耶識は蔵している。だから、何でも、もう無尽蔵に入りますから、そういうものが私たちの根底にあるんだとすると、これはまた自分というものは手に負えないもんだということになります。それにも無覆と有覆というものがあって、無覆というのはこれは勝義で、有覆というのはこれは世俗諦です。そしてこれら八識と七識と六識というものが共同作業をして、私たちの流転という現実を作り上げているんだと。だから五濁の世というのはもうこれで出来ているんだと、これはたらきだというわけですね。八、七、六の共同作業だと、こういう感じでさらさらっとおさえております。

〈三〉

ところが、これを還滅門で見ていったらどうなるか。ここで「相伝」は独特の方法を取りまして、この『成唯識論』の解釈とともに『大乘起信論』というものをそこに持ち込みます。もともと『大乘起信論』という弘法大師も伝教大師も一生懸命

読んでおられたものですが、『大乘起信論』が他力還滅門といったって、誰もそういうふうには読まないですね。もしそういう読み方をしていたならば、もう既に弘法大師が真宗を開いたかもしれません。しかしそうはなっていないですね。だから、『起信論』の原文を読んで、そういうふうを感じる事が出来る、それはすごいことだと思んですが、まず『起信論』の言葉で注目できるのは、還滅門になりますと順番が逆です。流転門だと現識、転識、業識と行くんですが、つまり六、七、八という順序で行くんですが、還滅門になりますとね、まず最初が業なんです。業識なんです。次に転識、現識と。しかもその業識の捉え方が全く違いますね。

まず『起信論』はどういつているかということ、業相、これは無明のはじまり、無明の原因ですね。

(無明)業相は不覺に依るを以つての故に、心動ずるを説きて業相と為す。覺する則んば動ぜず」文

動ぜずということは不動になる、不動明王みたいになるので、これはどう考えてもこんなこと他力をいつているとはとも思えません。しかしこれをですね、『三識之事』はこういうふうにあります。

まず「業識」というのは(これは阿頼耶識のことですよ、一心の動ずるをいう。動は可発の義なり、可発とは信心のあらわるべきを可発という。それを祖師は「真実信業識」とのたまえり。(中略) 真実信の言は他力なり

(『真宗相伝叢書』第十八巻 239 頁)

つまり真実信とは他力ということだと。だから真実信の業識というのは他力の業識ということですね。こういうことがどこに出てくるかと言いますと、行巻ですね。

良に知りぬ。徳号の慈父無さずは、能生の因闕けなん。光明の悲母無さずは、所生の縁乖きなん。能所の因縁、和合すべしと雖も、信心の業識に非ずは、光明土に到ること無し。真実信の業識、斯れ則ち内因とす。光明名の父母、斯れ則ち外縁とす。内外因縁和合して報土の真身を得証す。

(『真宗聖典』第二版 210 頁)

ここまではですね。ここという真実信の業識というのは、『三識之事』では他力の阿頼耶識ということなんだと、そうおさえるわけですね。真実信というのは他力ということ、業識は阿頼耶識ということなんだと。

然れば、当流に沙汰したまうところの信心は、流転門の我相を執するより起こる処の六識の所知にあらず、他力を談ずる還滅門の第八如来蔵識、仏智を薫習なり。故に他力の大信心とこれを伝えまして「善惡の凡夫ともに仏の方よりたまわる信心」といえるなり。

(『真宗相伝叢書』第十八巻 239 頁)

だから、阿頼耶識は何でも入ると言いましたが、何でも入ると言うことはですね、如来が入るわけですよ。如来蔵だというわけね。そしたら、如来が入ったら、その阿頼耶識に普通は種子というものが薫習される、それが迷いのもとになると、しかも自分の気が付かないうちにその種が入って、それがやがて

芽を吹くんだという話になっていきますが、それが逆にですね、我々の知らないうちに仏智が繰り出されて、それがいいわけ、他力の大信心という、そういうものを現行する、それを現実のものにしていくわけですね。だから、これは「善悪の凡夫ともに仏の方よりたまわる信心」といえるなり」。この「仏の方よりたまわる」というのはどういうことかという、その阿頼耶識に種子をたまわるわけですね。そうしたら、これが、先程媒体というような言い方がありましたけれども、媒体となるものがですね、実は転識というはたらきなんだと。

転識とは『起信論』に云わく「転相者。以依動故能見。不動則無見（転相は、動に依るを以ての故に能見す。動ぜざれば則ち見ることを無し）文」。（同240頁）

これも普通はですね、そういう心が動くから、その見というのは遍計所執ですね、遍計所執が現れると。ところが、その心を動かさなかったらそれは現れないんだと。これだけ言ったらまるで座禅の指導書みたいな感じですね。しかし、ここで能見という、能く見るというね、——この見というのは『起信論』でも自分の迷いだという見ですね、見というのは迷いなんです。ところがこれをひっくり返して、

能見とは仏の智見なり。この智見によりて大慈悲を見（あら）わして、光明名号、内外因縁等の種々方便し転入の説を開きたまう。（同）

転入する。「転」というのはですね、同じ言葉に「変」という言葉があります。変わる、転変。「転」とか「変」とか。こ

れは蓮如上人の口伝にあるそうですが、「転ずる、変ずるといふは、物を置き換えて別の物を置くにはあらず、それがそのま別の物になるなり」。「悪を転じて徳を成す正智」（総序）だね。転というのは、そういうふうに材料は同じ。絶対変わらない物は事実ですね、ありのままの状態という物は絶対変わらない。「柳は緑、花は紅」、しかしそれを流転門から見れば「柳は緑、花は紅」というのは迷いの種ですが、それが還滅門から言うと、これはまさに如来だということになる。だから同じ柳とか花とかを見ていても、見る立場で、迷いともなれば如来とも仏ともなる、そういうことがあるんだというわけですね。だから流転門で考えると、私たちの現実というのはもう救いようがない。なんで救いようがないかというと、自分でコントロールできないからです。それこそ無始より已来、こういう世界、こういう迷いの相というものを持っていて、それはもう業のはたらきなんだということになります。それが逆に還滅門から言うと、心が動くというのはそこから大悲心が生まれるはたらきなんだと、大悲心が現れる。

そして最後に現識。この現識というものは何なのか。これは、現識とは『起信論』に云わく、「現者、以依能見故境界妄想（現とは能見に依るを以ての故に境界妄想す）文」（同）妄想の世界がいっぱい現れるのだと書いてあるのは、結局『起信論』も流転門に立っているということですね。しかしこれをですね、境界というものを妄想の世界と捉えずに「境界とは仏境界なり」と。

境界とは仏境相なり、即ち『論』（『浄土論』）には「不可思議妙境界相」と判じましまして報土の相なり（不可思議妙境界相、これは報土のことである。つまりお浄土のことですね、願に酬報された世界）。これはこれ能見によりて現する境界とあれば、能見たる仏の智見のゆえに妙境界相はあらわるるなり。ここを『讃』（『和讃』）には「安樂仏土の依正は 法藏願力のなせるなり」（同）

と。「依正」ということは身と土ですね、身土。だから、仏と浄土。つまり、この違いは何か。同じ八識なんですけれども、その八識がなぜこういう大きな違いになるかというと、そこに私たちを主人公にするか、それとも仏あるいは法藏を主人公にするかという問題があると思います。それによって立場が全然違う。そうしたら、

能見の仏智見に転ぜられし上は（つまり、この如来によってみそなわされたことによつてですね）、真仮みなこれ大悲の誓願に酬報する報仏土の相とあれば、見聞覚知、酬報のありさま、みな現生に獲証するの益なり。（ここから大事です）これを「現生に十種の益を獲る」とものたまひ

「亦獲現生無量徳」ともいえり。

（同 241 頁）

ここが非常に大事なところでして、死んでからの問題では、全然ないというわけですね、浄土はね。まさに現生に獲るものです。ただ、この場合の「現」ということですが、私たちは「現生」と書いてあると無意識の内に現世と来世の関係に見てしまふ、何かそういう癖があるんですが、そんなことをいって

るのではないでしょ。これは「現行」といっている。現行の生です。だから来世は関係ないでしょ。もともと死後の話は関係ないです、仏教は。現行の生であるから、阿頼耶識から大悲心が転じて、そして浄土が現行する。例えば、「現在」という言葉がありますね。私たちは過去と未来と対比して現在だといっています、そういうのではないんですよ。現行しているのが現在。そういうふうに考えますと、

祖師は「真実信業識」とのたまえり、必ずしも業識は信心なりとは頭わしたまわず。これをもって知るべし、信心は体なり、業識は喻なり。それを第八識が信心なりといわば、識が体になりて信が用になるなり。例せば「大信心は、仏性なり」とあらわしたまえる仏性を信心なりといわば、自性唯心になるなり（同 243 頁）

仏性が信心といえれば自性唯心に沈む。私もちよつと調べてみたら、ある大谷派のお坊さんが Google で書いているんですね。この信心業識の解説をしているんですよ。どういうことをいっているかと言ったら、私たちは如来よりたまわる信心というのとは皆もともと持つておる、それが色んな雑妄と言つか、とらわれによつて、もう見えなくなつて覆面されておるから、それを取り除いて本来の大信心が現れるようにしなければならぬと書いてあるんですね。これって、いわゆる聖道門の仏性論です。皆ここに入る、勘違いするんですよ。江戸時代の異安心も皆ここ。自分の中に何かこう清らかな尊いものがあつてですね、それを磨き出せばいいんだという話になっている。そ

の清らかな尊いものは如来よりたまわっているんだという話ですね。そうではないんだと。それは要するに、仏性が信心だというのと一緒なんです。そうではなくて、なぜ親鸞聖人は「大信心は仏性なり」といわれたかと言ったら、大信心の当体がそもそも仏だから。だから、いま真実信とありましたけど、他力そのもの。だから、大信心イコール他力ですから、仏性が他力だといったら、それはおかしい。それは流転門と還滅門を混同している。そうではなくて、他力が仏性だというべきだという。この違いが非常に大事だというわけですよ。

（四）

それで、曾我量深という方は今の新潟市の西の方に生まれた方です。味方村かな。そこから東の方に行きますと阿賀野市というのがあります。ここに昔、香樹院徳龍という方がおられました。お寺は無為信寺です。親鸞の高弟の無為信のお寺です。この香樹院が当時の高倉学寮を代表する唯識の研究家でした。

唯識というのはですね、ちょうど西本願寺の初期の学寮を巡って月感・西吟の承応闘牆（じょうおうげきしょう）騒動というのがあります。それからそれがずつと尾を引いて三業惑乱に至る、そういう問題がございまして、月感は結局大谷派に帰依、帰参したんですね。先程、言いました、嚴如上人が熊本でおかみそりをなさったという延寿寺というのは、この月感が開いた、もともと興正寺派の寺なんです。そういう騒

動がいっぱいあって、やがて高倉学寮というのが出来た時、唯識は禁止と。唯識を勉強すると皆ややこしいことを考えるようになるから、もう止めとけと。だから高倉学寮の中でも唯識を勉強したり研究したという講者はほとんどいません。一つだけ例外がありまして、稲田の西念寺に良水という人がいて、この人は皆の反対を押し切って、あえて唯識専門で研究した人です。ところが、天明の大飢饉が起こって、それで自分のお兄さんが何か、これは無量寿寺というお寺があつてそのお寺の住職が飢饉で亡くなったので、西念寺の住職候補であるはずのお兄さんがそちの住職になったので寺を継がにやいかんようになって、泣く泣く高倉学寮を中退して稲田の西念寺に入ったんですね。そして彼はやがて非合法の真宗移民ということを始めるんです。彼は結局最後は自ら責任をとって切腹をするんですけども、関東、東北へ北陸の農民が移る、真宗移民が行われた、そういう潮流を作った人物です。

その時に良水は盛んにですね、因果ということをいっております。因果。私らは因果の道理を知れば、堕胎とか間引きとか、そういうことは人間は出来なくなるんだというようなことをいっているんですよ。なんで真宗移民をするかというところ、真宗門徒は堕胎、間引きは絶対しないから。だから単に人口を埋め合わせるのではなくて、堕胎、間引きの習慣を止めさせる。水子供養を止めさせるために良水は移民に踏み切ったんですね。その時に因果の道理ということを盛んにいっています。これ、今まで僕は因果の道理というのは、漠然と何か仏教の教え

程度のことです。捉えていましたが、そうじゃない。これは唯識で考えなければいけません。唯識で因果というものを考えた時、どうなるか。私の従兄弟に木村宣彰という人がいるんですが、この間、棟方志功の五十回忌を私がやった時に木村さんが来てましてね、私は何となく宿業は是本能の話をしましたら、それを聞いていて、急に「やつと分かった」というようなことを言われるわけです。彼は中国仏教の大家ですよ。それがね、「やつと分かった」というのは、この因縁ということが分かったというわけです。長い間、仏教を研究して、大谷大学の学長にまでなった人が、やつと因縁ということが分かった。何の話かというと、それがやつぱり宿業の問題ですね。

ちよっとその話になる前に、阿賀野市の水原(すいばら)という所にあつた無為信寺の香樹院は、なぜ西念寺の良水の跡を継いで唯識を学んだのか。おそらくは香樹院は、むしろ『俱舍論』の研究から入つたんだと思うんです。『俱舍論』ということは天親菩薩、世親ですから、『俱舍論』をやつていくうちに、どうしても『成唯識論』ということになっていったんだろうと思うんです。私はたまたまその無為信寺で法話をした時に、「住職から「実は香樹院の、いわゆる書棚というか、書庫、これが当時のまんまになっているんですよ。見ますか」と言われまして、「ぜひ見せてください」と。そうしたらね、何か天井のロックを外したら一部がサツと下りて、階段で上がれるようになっていてね、中に入ったら香樹院が置いたまんまにその資料があるんですよ。もう見たらいきなり『成唯識論』

全十巻がボンと置いてある。曾我先生がいつておられたのは、「私はもう子どもの頃に『成唯識論』を暗記していた」と。なんでしょうかという、当時の新潟地方はそういうことが当たり前だったというような言い方をするわけです。それはどう見ても、この香樹院の影響です。他所では当たり前じゃないですから。それは自分は当たり前だと思つていて、浩浩洞の人たちと付き合うようになってですね、それで何か皆は、まあ暁鳥さんもうだし、皆は盛んに阿弥陀を問題にする。ところが私はどうしても法蔵というものが気になるんだというわけです。なぜか分からなくても、皆さんは阿弥陀を議論するけど、自分は法蔵が気になって仕方がない。それはやつぱり唯識なんかをやつてたせいですかね、というようなことをおっしゃつたらいいです。その唯識です。

曾我先生は『起信論』なんていうのは問題にしておられなかつたかもしれません、『成唯識論』というのは、これは実に論旨明快なわけです。しかし、ロサンゼルスで改めて『三藏之事』を読まれた時に――。やがて曾我先生の中で法蔵菩薩論というのが出てくるわけですが、前回のここの集まりで話が出たことで、曾我先生はロサンゼルスから帰ってきてから清沢満之さんのことをずいぶん言われるようになったと、あれもすごい気になる話ですが、何かこう、繋がる。清沢先生は「大谷派なる宗教的精神」ということをいわれます。あれは『教界時言』ですか、「大谷派なるものは何れの処に存するか」。伽藍とか門徒の数が多いとかいうようなことではない。「大谷派

なる宗門は大谷派なる宗教的精神に存する」という有名な言葉がありますね。「え、何かおかしいんじやねえの」と僕は思ったんですよ。大谷派なる宗門は『教行信証』に存するとか、親鸞聖人に存するだったら、僕も分かるけど、大谷派なる宗教的精神に存する。これは一体何のことか。これがずっと時代が移りまして、昭和二十三（一九四八）年、真人舎というものが三重県に出来ます。その真人舎の『真人』という雑誌の一周年に、「信心の道」という文章を曾我先生は書いておられます。その中で教如上人論をいつておられるんですね。教如上人は大谷派を作った、東本願寺を作った。皆は教如上人ではなくて、これは徳川家康が作ったんだというけれど、自分はどうしてもそうは思えない。もともと有る教団を二つに割ったとか、こんな話はとても了承できない。やはり教如上人にはそうならざるを得ない何かが、精神があつたんやというわけですね。自分は確たる資料を持つてゐるわけではないが、と言いながら、教如上人は徳川家康から領地を寄進すると言われて、それを断った、そんなものをもらうと子孫が教化を怠けるから領地はいらないと断つたんだと、こういうところに教如上人の精神が見えると思ふんだと、いわゆる大谷派樹立の精神が見えるんだと。その程度のことしか書いていないんですけれども、実はこれは戦前——曾我先生も、最近はそのうことを皆いわなくなつたといつてゐるんですけれども、戦前はいわれとつたんです。それは何かと言いますと、教如上人の『辞禄の御遺志』。この中で教如上人は、一切を門徒の信施に

依るんだと。決して禄をもらうとか領地をもらうとかで宗門を存続させるのではないんだと。石川舜台は十万石といううなことをどこかでいつてゐるんですが、それぐらい用意したんでしょね。それ程の申し出をなんで断るのか、実はそこに、いわゆる法施と信施という重要な精神があつて、それを以つて相続講の理念とするとしたわけです。だから相続講というのは教如上人の精神が出てゐるんだと、こういうことが一応あるんです。しかし、問題は教如上人の教学というものがどういうものであつたか、これを考えたいわけですね。先程まで『三識之事』というのは、明らかにこれは教如上人が学ばれた「相伝」であります。

〈五〉

それで、曾我先生が言つておられることの中に、法蔵菩薩阿頼耶識論は一応置いといて、宿業本能論というのがあります。この「宿業は本能」という問題ですが、これが私の人生にとつても非常に重要な役目を果たしておりまして、実は私は不登校になつて、荒れて、もうずいぶん暴力も振るつたり、まず学校に進学するというようなことは全く考えていなかった、そういう中学時代があつたんです。その時に父親が手に負えないようになつて、風呂敷包みを渡されて、「お前、これ、吉田龍象という人の所へ届けてくれ」と。家のガラス五十枚ほど割つた後だったものでちよつと気が引けて断れなくて、それを届けに行つたら、吉田龍象さんがね、「上がつてけ」と言われて、

こう言うんです。「お前、ここに来たからには何かわしに聞きたいことがあるやろ」。「ありません」「ありません」って言うたけど、「あるはずや」「あるはずや」って、二階に通してそんなこと言われるんです。そうしたらぼろつと本音が出たんですよ。「何をやっても面白くない時はどうしたらいいんですか」と。そうしたら、それに対してその時はこうしたらいいという答えが返ってくるかな、何か知らんけど、そういう処世訓みたいなものを言われるのかなと思つたら違うんですよ。「では、わしの方から聞くが、面白いことが見つかったらお前は どうするんや」と。そうしたらね、全く答えられないんですよ。何かその時に、ちよつとやつぱり、自分の変な頑張りとか、プライドとか、あるいはコンプレックスが抜けましてですね、それで大谷大学に行くことになったんです。その時にですね、はつと思つたらそこに大きな襖があつて、そこに観音さんが四体書いてある。裏に「宿業者は本能」って書いてあるじゃないですか。私もうびつくりしましたですね。棟方志功というものの作品をまともに見たのは初めてですからね。もうびつくりしてですね、「どうしてこんなことになったんですか」と言ったら、柱に短冊が掛けてあつて、そこに曾我先生の字で「宿業者は本能云々」とかあつて、「量深」と書いてあるんですよ。「棟方、これ見た途端にこうな、これも書き出したんだ」というんですね。そのことを龍象さんが文章にしておられて、この間、見つけたんです。

曾我先生は何処へ行つても「宿業者は本能。すなわち感

応道交です」と言つておられた。誰も何のことやらなん解らん。その言葉を私の家の二階の短冊に掛けていた。

そこへ棟方志功さんが遊びに来て、「宿業者は本能か、感応道交。これじゃ、これじゃ！」言つて、家のかあちゃん、表具屋へ頼みや銭要るもんじやから、いつもお参りにくる学校の校長さんの福原さんと夏休みに貼った襖に、その襖を倒して、三番目の尋常小学校の子供に「家へ行つて絵の具取つてきてくれ」と言い、そして絵の具を持ってくるなり、びしゃびしゃと、観音さま四つ書いての、そしてその裏に、一つの襖にでかい字で三字づつ、「宿業者は本能 則感應 道交」と書いた。家にでかい筆が無い言うたら、刷毛持つてこい言うての、あれは刷毛で書いた字やちや。自分自身が書いた字に、「わー、後光が射いとる、後光が射いとる」と拝んどる。自分の書いた字が大事での、手叩いてな。時々この字を見に来られる。

棟方さんは、日本中何処へ行つても「私は、ご安心ちゅうものは、宿業者は本能、すなわち感応道交。この他に私の言葉として信条をあらわす言葉ありません」と言っている。曾我先生もそれをいつも言うていた。「誰も解つてくれません（宿業者は本能って言葉がね）。けれど福光に（まあ私たちのところですよ）、仏法を聞いたことのない人に解る人がいました。これが仏法不思議というものでしょうか」と。

棟方志功だけが分かってくれたってよく言われたんです。

これがなんで棟方は分かったかというところ、一つは棟方志功は失明を宣告された頃でした。だから、何かそこにやっぱり宿業というものを感じたんでしょね。お医者さんから言われたらしいんですよ。「もうあなたの目はね、わしは医者やから病氣は治すけども、生まれつきは治せん。宿業やと思ってくれ」と、そういう言い方をしているんですよ、お医者さんはね。ところが、私たちもついつい宿業というところ暗いジメジメしたものとしてどうしても捉えてしまう。重苦しい、どうにもならんものやと。ところがこの「宿業は本能」ということについては、曾我先生が『如来と衆生との感応』という文章を書いておられて、これは、

いつつの不思議をとくなかに

仏法不思議にしくぞなき

仏法不思議ということは

弥陀の弘誓になづけたり（『真宗聖典』第二版593頁）

衆生多生不思議、業力不思議、龍力不思議、禪定力不思議、仏法不思議と五つの不思議がある。この中の、

業力不思議の業とは本能である。人間はいろいろ研究したり、考えたりするから、すべて本能で動いているのではない、と云う。しかし、人間といえども、その人間の動きを本当に決定するものは本能であり、業（これは業識です。阿頼耶識）がこれを決定するにちがいない。

これはまたこの阿頼耶識というものが根底にあつて出てく

ることで、曾我量深さんの有名な『親鸞の仏教史観』ですね。

物に對抗して心という特別の存在があるのではなくて、形のある物において形なき心が回向表現する。物によって心がかたどられ莊嚴される（これを現行というべきなんです）。したがって心の本性は物に象徴せられつつ、すなわち物を否定しそれを超えて心は常恒に形がない、真心は常に無形である。物を超えて常に無形のゆえによく物にかたどられて、形ある物において形なき心が初めて真実に表現回向するのである。物によりしかも物を否定して、そうして物において永遠に一切の形相を超えたる心それ自身の面目が表現回向せられるのである。私の浄土観は浄土史観にほかならないのであります。

この場合の「史観」は、歴史もそうなんです、現行なんです。単なる歴史家のいう歴史じゃない。それで、これとても難しい言葉ですけど、棟方志功はこれ分かるんです。自分の描いた絵を、形のない物は形ある物において表現回向するんだとしたがって、棟方志功はもう自分の書いた物を、こうやって、おしいたいて、「これは私が書いたものではない、如来様が書いた」。もうはつきり言う。それは非常にはつきりした人でした。

（六）

さて、こういうふうには、藤原先生も最初言っていた、唯識と

いうのを通しますと教えというものが何かよりリアリティを持つんですね。そこで最後に、教如上人の教學って何なのか。そこを見ておきたいと思います。そんなものはどこにあるかというと、実は『神田徳本寺由緒秘録』です。これは最近『大系真宗史料』（東西分派）に入ったばかりで、普通の人が目にするのはもう非常に目新しいことでありますが、この中に教如上人の言葉といわれるものがずいぶん収録されております。その中で、まず文禄三（一五九四）年九月十日、これは秀吉が教如上人を大坂城に呼びつけて、いきなり引退を命じた、その時のことだとされております。皆はこうなったら反乱を起こして秀吉をやつちまおうと言うようなことを言った。三家老はそんなことを言うんですよ。ところがそれを制してですね、汝等能聞け かくの如く窮する時に当りては 兼而ならへる平生業成の領解に思ひ合すべし。凡祖師聖人以来代々相承し弘伝する所は（すなわちこれは相伝をするところですね）、一念發起平生業成之安心決定の行者なれば、（安心決定することだと、ここはいいですね、もし）正定聚に住し仏になるべき身に定まれるうへは、一切之志願是に満足す（これ以上の喜びはないんだと）、然るうへは、世間之有様に任せ、（ここで王法というのが出てくる）王法をもて本とし世をす（す事肝要也と、我も覚悟し、人にもおしへ聞しむる斗り也。

（『大系真宗史料 文書記録編14』119頁）
仏法王法論といったら、蓮如様の「王法は額にあてよ。仏法

は内心に深く蓄えよ」（『蓮如上人御一代記聞書』『真宗聖典』第二版103頁）、これを、王法を、今までどういうふうに解釈してきたか。よくいうのは、天皇の命令。あるいは、世の中の一般的ルールが王法だとか、ほとんど世俗論で解釈している。これは分かるだけで、黒田俊雄さんでもそんなことをいっています。でも、そんなことか。「王法は額にあてよ」が、そんなね、蓮如様が何か世の中に迎合しておるような話になってしまいうじゃないですか。教如上人はここではつきりと王法論を出しているんです。

此安心には転悪成善之益有、至徳具足の益等もろもろの利益をそなふ（同）

この「益」は現生十種の益のことです。現生十種の益というのは、改めて言う必要はないと思いますが、『聖典』を見ておいてもらおうと

金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、必ず現生に十種の益を獲（『真宗聖典』第二版273頁）

親鸞聖人の言葉です。「必ず現生に」。現生っていうのは先ほども言いました、来世に対する現生じゃなくて、現行しているた。今です。「一には冥衆護持の益、二には至徳具足の益、三には転悪成善の益」というありまして、十ありますね。このことをいっているんです。いわゆる十種の益、これを親鸞聖人がきちっと書いておられると。この現生十種の益が王法だというわけですよ。王法の基本だ。王法は誰の法かというところ、

我朝の王法は、おほけなくも、和国之教主聖徳皇定め給へ

る王法にて、則十七憲章つくりては、王法之規模とし玉へり和我祖も讃嘆し玉ふ。

(『大系真宗史料 文書記録編14』119頁)

これは『皇太子聖德奉讃』にきちんとそれはあります。だから聖德太子の法だというわけです。

其第一章にのたまはく、和をもて貴しとす、さかふ事なきを宗とすといへり。(同)

例えば、私らは「平和」「平和」なんて言つて、戦争してはイカンとか何とかありますね。争つちやイカンとか。いくらそんなこと言つても、現実はそのはならない。では、どうしてもなるかという、これはやはり阿頼耶識から現行をされてくるものでないと、それは本物でないということになりますね。だから、和というものは何かというと、この他力から現れるものが和だと、こういうことをここで早くもおさえているんですね、文禄三年の時点で。これが六年後の慶長五(一六〇〇)年八月十日。これどういう時かと言いますと、徳川家康を訪ねた教如上人が帰つてくる時に石田三成がバリケードを張つてですね、教如上人を捕まえて、もう亡き者にしようとしているわけですね。場所は岡崎です。岡崎において、大勢の門徒がそこに集まりまして、こうなつたら大々的な一向一揆を起こして石田三成を打ち破りましょうというようなことがあるんです。そういうことで、皆で集まつて作戦会議をやるんですよ。その時、教如上人が皆に言つた言葉です。

門末の懇志満足す。

(同129頁)

お前らの気持ちはありがたく受け止めておくが、

去ながら是より尾州 濃州は隣国に而、兼て聞、石田美濃国笠町(松力)之渡、下臈魚之渡両所に関において、往来之人を改め、たやすくは通さぬよし、先達て下向之砌の子細もあれば、定而相支ゆる事は必然也。此勢ひをもて推て通行せば、石田いかにするとも支ゆる事は叶ふまじ、いかんとなれば、尾濃の両国にも数多門末あれば、彼等も又此勢ひとなして内より騒起せば、石田いかんともすべからず。

(同130頁)

ここまでいいですね。お前たちの言う通り、もしここで一揆を起こせば石田を破ることはできるだろう。間違ひなく勝てる。しかしというのはね、

然る時は、此方より勢ひをもて鬭争を好むに当りて、大切なる宗意に違ふ、此所を能々思ひ斗ふべし。(同)

それは親鸞聖人に背くことになると。真宗の教えに背くのでよく考えよと。その後、これが出るんですよ。現生十種の益が。

金剛心之行者には冥衆護持之益有、転悪成善之益有、何ぞ世俗とひとしく(ここで世俗諦が出ます)勢をもて争ふべけん(だから勝義諦に立てというわけですね)。既に大坂数ヶ年之籠居も、しかしながら冥助によつて今日に至、此身安全に化導つゝがなし、ゆめゆめ疑ふべからず。安心之上は、何事も王法をもて勝負を決すべしと。(同)

ここは教如さんらしいですが、王法で勝負をつけるという。

その王法というのは、具体的には聖徳太子の『十七条憲法』であります。が、もともとそこを本質的に見ていった時に、阿頼耶識から現行をする現生十種の益ですよ。

先程も見ましたけれども、『三識之事』の現識のところに、浄土とは何かといったら、私たちは現生十種の益を通して浄土を認識するわけです。どこか西の方にある浄土じゃない。だから、現生十種の益の内容が浄土なんです。あの世でもないです。そう考えますと、教如上人が一大自覚を持つて仏法再興を宣言した。だから、もはや石山本願寺がどうなるとか、そんなのは関係ないです。もう仏法再興が問題なんです。そこで、最終的にこの後、家康が烏丸六条の地を寄進して、東本願寺が始まっていくわけです。

これが、言ってみれば、本願の歴史という話でございまして、だいたい大桑先生もずいぶんいつておられたけれども、何か教如上人という人を敬遠して、遠ざけて、あんまり触れたくないという、何かそういう宗門の基本姿勢がある、これは違うんだと、だから教如上人の理念というものを、何がなんでも大谷派はつきりする必要があるということを言っておられました。大桑先生は一生懸命、例えば『文類聚鈔』を教如上人は非常に好まれるということで、晩年は『文類聚鈔』の研究をしりしておられました。

しかし、私はやっぱり『三識之事』ということを通じて、教如上人がここで力説しておられる現生十種の益ということが大事だと思います。教団というものを、現生十種の益をもつて

建てるんだという、このことに教如上人の理念を見たいです。しかも、それが曾我教学の成立にも大きく関係するテキストであるということで、もちろん戦後の曾我教学ですけれども、こういうふうに考えますと、私も何となく、棟方志功の『宿業は本能』——吉田龍象先生というのは曾我先生の名代として全国法話して歩いた人です。この人を通して棟方の字が飛び込んできた時、私もその時に根底で何かこうひっくり返ったものがございました。そういうことを思い出しながら、今日は皆様にお話しできるご縁をいただきまして、誠にありがとうございます。

【質疑応答】

A

王法が現生十種の益だというのはまさに目から鱗で、ぶつたまげたんです。これは先生は色んな資料をあたってというよりも、曾我先生のように「感得しました」というように、何かある時ぱっと来たんですか。

太田

教如さんがこれを書いていて、それでその後、『皇太子聖徳奉讃』を見たら、まさにその通り書いてあるから、その時にやっぱりちよっと電撃に打たれたような感じがしましたですね。まあそういうことです。はい。そんな感じしませんか。

A

いや驚いたというか、目が覚めるどころか稲妻に打たれた感じがしました。

太田

私もそうだったもんですから。それで何かね、今日も藤原先生が言っておられたけど、やっぱりガザ地区の問題（二〇二三年十月七日のイスラム組織ハマスのイスラエル侵攻以来の戦闘状態）とか色々ありますね。僕はもう、この現生十種の益と、王法は聖徳太子の『十七条憲法』だと。しかも、その教如さんがそういうものを踏まえて第一章を挙げて「和をもて貴しとす」と言っているわけです。少なくとも政府が言うような「和」ではなくて、やはりこの大谷派の独自性として、これを言わなければならぬ「和」というのがあるんじゃないかと思っています。

（二〇二四年十月十九日 真宗佛光寺派本山佛光寺 白書院）